

樂市樂座の源流を寺歴に探る

本徳寺住職 大谷昭仁

お寺は時代の褶曲作用によって大きく変化してきた。元来お寺はどの様な人々によって構成され、どのような形態で運営されていたのか考えてみよう。

親鸞聖人は、獵師（漁師）と商人を「屠沽の下類」と呼ばれ、念仏による救済の対象とされたことが「唯信鈔文意」に伺える。また、中世の本願寺教団の立役者・蓮如の御文章には、

「タダアキナヒヲモシ、奉公ヲモセヨ、獵スナドリヲモセヨ、カカルアサマシキ罪業ニノミ朝タマドイヌル我等ガゴトキノイタズラモノヲ、タスケントチカイマシマス弥陀如来ノ本願ニマシマスゾトフカク信ジテ一心ニフタゴコロナク、弥陀一仏ノ悲願ニスガリテ、タスケマシマセトオモフココロノ一念ノ信マコトナレバ、カナラズ如来ノ御タスケニアヅカルモノナリ…」(文明三年十二月十八日・蓮如御文) とある。

ここにも明確に念仏救済にあずかる者が獵師であり漁民であり、商人であったことが伺える。さて、これらの業をなりわいとする民は古代より悪人・悪党とされ、支配権力の埒外に置かれていた存在である。このような人々は朝廷・貴族が支配する土地に依存することなく、漁撈・狩猟に依存し、専ら独自の交易手段を持って、生活の基盤を築いていた生活者たちであった。支配権力からみれば、土地に依存する者は、税の徴収が容易に出来るため、まさに良民とされた。一方、民衆の大半を占める下類の民は山や河川、海に依存し、交易の移動を行うため行動範囲が広く、コントロールできない。支配者側から見れば、悪党下類と言わざるを得ない。

平安末期から鎌倉時代にかけて、表層を支配した古代の律令体制が崩壊していく中で、お念

仏の教えがこうした具縛の凡愚・屠沽の下類に浸透していった。

親鸞聖人の偉業は、成仏に見放された社会階級としての悪人・悪党を突き破り、人間の本質を見通す深い眼差しと、偏にこの悪人を悟りに至らしめんとする阿弥陀仏の願いを、民衆の心底にしっかりと両立させたことである。

ここに、名も無き民が念仏の教えに照らされて、自らの内なる「いのち」の深淵を初めて知った。この「いのち」の確かさが自らを変え、新しい自立的な生活権を獲得し、交易の場であるお寺を作り出す原動力になった。こうして、名目上の悪人から脱皮して、自立した同行・門徒に成長したのである。

室町時代、本願寺・蓮如は時代に即応して親鸞のこの教法を見事に時代に流した。彼の行動範囲は畿内を中心に琵琶湖沿岸、北陸、三河において顕著にみとめられる。言うまでもなく畿内とその周辺における二十程の寺内町の分布を見れば一目瞭然である。その最西端が播州・英賀本徳寺であった。

英賀の寺内町は、他の寺内町と同様、徳政免許・公事御免・賦役免除の特権を持った自治都市で、構成する民は、念仏の教えにふれて自立した商交易者が主体である。他に、大工、鍛冶師、鋳物師、瓦大工、石工、皮革業者などの手工業者によって自前で維持されていた。英賀は港湾機能を有し、西国から送られてくる物流の重要拠点となった。当然ながら寺内には市場が立ち、多くの人が自由に出入りして、人・物・金が行き交う活況を呈していた。天文日記にも散見されるように、大坂本願寺の白州では町民が綱引き、能や狂言・盆踊りなどが執り行われていた。このような考証から元々のお寺は現在のものとは大きく異なる形態で誕生し運営されていたことが分かる。

さて、コムサロン21と地元自治会の協力を得て、十年前から亀山本徳寺の境内で樂市・樂座が開かれている。

当時は、静かなお寺が騒がしく近所に迷惑がかかるということ、多少の躊躇もあった。

しかし、真宗という仏教は深山靈溪で修行するタイプのものではない。むしろ、人の出入りする市中において仏法を起すのが本義である。さらに、上述のように中世の寺内町では市が立ち、地域経済の中心であったことに気づいた。

総代の自治会長とも話し合せて、地元の理解と協力が得られたので、月一回のペースで樂市樂座が開催されることになった。今では毎回数千人を超える人が群参し、文化財見聞の社会的貢献にも一役買っている。

今まで、お寺に来る縁の無かった老若男女が、お寺の雰囲気新鮮さを感じ、仏教に五感で触れる事に関心を持ち始めている。

お寺には実に多種多様な人が来る。世間でそんな場はあまりない。色々な人と交流する中で、人との違いが分かり、徐々に自分が明らかになってくる。本堂で手を合わすと、全く異なる者同士が共に仏様から願われている存在であることに気づいていく。お寺だけではなく、地域全体でそういう社会を作らないと日本の将来は危ない。しかし、お寺もそうだが、この樂市樂座を安全に運営していくのは並大抵のことではない。

裏方の予想以上の準備と対策、現場での課題は山積している。警察や消防への届けをはじめ、出店の管理から、駐車場の差配、交通渋滞の対処、掃除や後片付け、イベントの企画、ボランティアの養成など数え上げればきりが無い。コムサロンのメンバー諸氏には頭が下がる思いである。